

## クオリア AGORA2015 第6回

### 「“無心”から “生きる”を考える」

#### 長谷川和子（京都クオリア研究所）

私たちは「我を捨てろ」「欲に走るな」「無心になれ」なんていうことを言われてきましたが、無心と言われても、なかなか、そうすぐになれるわけではない。どうしたら無心になれるのか、型から入ってなれるものかなど、皆さん方いろいろ考えたのではないかと思います。無心によって何がみえてくるのか、そして体得できるのか。きょうは、無心、稽古や修行などの研究をされている京都大学の西平さんをお迎えしました。この世に生を受けた私たちが、無心になることにより、日常の雑念や欲を払ってしなやかな生き方ができる…。第6回のテーマは「型と無心—稽古の思想のしなやかさ」です。

#### 西平 直（京都大学大学院教育学研究科教授）



ある学生が書いてくれたダーツの話から始めます。その学生は、大学に入るまで、ダーツをやったことがありませんでした。ある時友達に誘われ初めてやってみました。すると当たったんですね。もう一回やったらまたうまくいった。「うまいじゃないか」とおだてられ、今度は少し本気になってやり直してみました。するとうまくゆかない。どうやったらうまくゆかかと、と気にし始めたら、ますますできなくなってきた、というのです。

この学生は、「一体、稽古する、練習していくというのは、どういうことなのか」と書いてきました。練習など始める前の方がうまくいった。練習すると自分の体を意識する。うまく当てようと気負ってしまう。練習すると余計な「ギコチナサ」を招くことになるのではないかというのです。

この話は私に、教師になりたての頃の経験を思い出させました。私は初め立教大学の教職課程というところに勤めて、学生たちを教育実習に送り出す仕事をしていました。何年かしたころ、ある学生が、「自分は準備をしてから実習に行きたくない。まっさらな気持ちで生徒と正面からぶつかりたい」と言ってきました。

私は「悔しい」と感じました。なぜなら当たっているからです。しかし「違う」とも思いました。うまく整理はできないのですが、「準備しない方がいい」とは言えない。確かに万全の準備をして構えてしまうよりも、まっさらな気持ちで、子どもたちにぶつかってほ

しい。ではなぜ私たちは学生たちに準備をさせるのか。私にとってこの問いはずっと課題でした。そしてそこから10年ほど後に世阿弥の『伝書』を読んだ時、世阿弥もずっとこのことを考えていたことを知りました。

・「似する」－「似せぬ」－「似得る」

世阿弥は「無心の舞い」を追究しました。無心で舞うことが最も美しいというわけです。では稽古などしない方がよいのか。無心で舞うことが目的ならば、稽古などしない方がよいのか。最初の時の気持ちのままにいていいのではないか。

ところが世阿弥は徹底して稽古せよと言います。稽古しろ、用心しろ。つまり意識化することを勧めるのです。「あらゆる自分の動きを意識化せよ。自分の気が付かないところに弱みが出てくるのだから、あらゆる機会を使って用心を極めよ」。ところがそう言ったすぐ次の文章に、「しかし用心している限り名人とは言えない」というのです。「用心に留まっている限り、名人とは言えない」と、逆説的なことを言うのです。

一方では「用心しろ」といい、他方では「用心してはいけない」という。この逆転するダイナミズムを見ないと、世阿弥の文章は、まるで混乱していることになってしまいます。あるところまで行ったら離れる。しかし最初から、それを求めてはいけない。一番大切なことは直接求めてはいけない。それを私は世阿弥から学びました。

レジュメをご覧ください。「意識に囚われる危険」。世阿弥は、一方では、意識しろと言います。意識することは大切だ。ところが他方では、意識に囚われてしまう危険を説きます。意識に囚われることが人間にとってどれだけ厄介か。特にパフォーマンスにおいては、これが決定的な災いになる。内側から湧いてくる流を意識が止めてしまう。つぶしてしまう。ですから世阿弥は「意識に囚われるな」と警告します。意識に囚われる危険について繰り返し語るわけです。

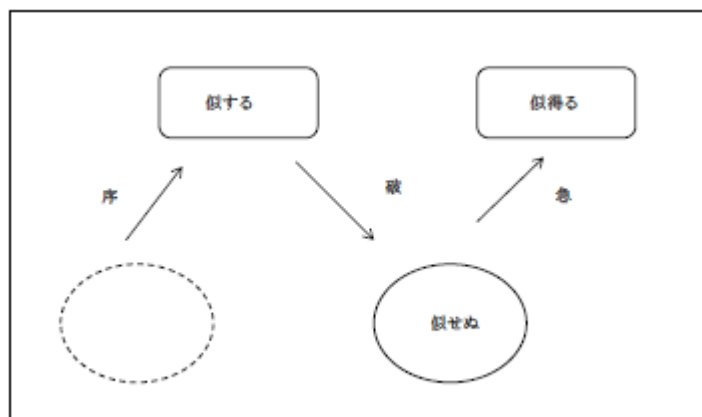
そして実はこの点は、日本の思想の中で、様々な形で繰り返されます。例えば、沢庵禅師という人は、柳生の剣について書いた文章の中で、「一所に心を止めてはならない」とか「心を取られる」という言い方をします。沢庵の言葉で言えば「無心とは、心をどこにも置かぬ」こと。どこか一点に心を止めてしまっただけではいけない。いつも心を流しておく。360度、全方位的に、心は流れていなければならない。

しかしそういう沢庵も、実は、前段階として、「心を止める」稽古を勧めています。集中すること。自分の指先まで完璧に意識する。しかし意識している限り、一所に心が止まってしまう。そこでそこから離れる必要を説く。むしろ「心をどこにも置かぬ」こと。

ところがその一番大切なものを最初から、直接求めてはいけない。いわばある種の回り道です。初めから「心をどこにも置かぬ」のではなくて、一度集中した後そこから離れる仕方で「心をどこにも置かぬ」状態を招き寄せる。そうしたダイナミズムなのです。

そのダイナミズムを学生たちに説明するために、お配りしたチャートを使います。(資料)

世阿弥は「似する」「似せぬ」「似得る」という言葉を使いました。能は、ご存知のとおり「真似る芸」でした。物真似から始まったわけです。そこで「似する＝真似る」。最初、子どもの時といいますか初心の時は、とにかく真似ることを一生懸命やります。しばらくすると真似ることができるようになる、ということは、意識化できる、用心できるようになる。するとある時点から「似せぬ」という芸に移っていくというわけです。



この「似せぬ」についても、語ればいろいろですけども、例えば「女の仕草をする」というところで、「女性は女に似せようとしていない」といいます。女性は、女に似せようとしなくて、女として振る舞うことができる。それが「似せぬ」。似せる必要がないと言えましょうか。なりきっている。もはや「そのもの」である。したがって「似せぬ」とは、「意図的な作為の放棄」です。もはや何もしようとしなくて、無心という言葉にかなり近いと理解してよいと思います。

ところが、無心の思想は、ここで終わりではありません。「似せぬ」を続けていると、ある時、「似得る」ということが起きる。意図的に似せようとして似得るのではなくて、もはや似せようとしなくて、ある意味で「あるがまま」を保っていると、ある時、不意に、文字通り、意図せず出てきてしまう。能の舞台で考えれば、例えば、シテが、ワキと囃子方などとのコラボレーションの中で、自然にこう振る舞うしか他にありようがないのだという仕方で「似得る」が成り立つ。

「似する」「似せぬ」「似得る」。「似する」方向に、一生懸命頑張って技術を磨くのは、実は反対のベクトルと言いますか、そこから離れる「似せぬ」の方向に逆転するためである。その場合、自然に離れていくと語られる時と、苦勞して離れていくべきだと言う時といろいろです。例えば、座禪の修行などは苦勞して「似せぬ」に向かってゆきます。意識的な「似する」の地平から、無理やり身を引き剥がして、離れようと努力する。ところが、離れていくと、ある時、突然、新たな言葉が生まれてくる。いわば、「言葉のない地平」に新鮮な言葉が生まれ出てくるというわけです。

実はこの点はとてもデリケートです。というのは、「似せぬ」を追究し続けることこそ無心である、という見解もあるからです。そしてその視点から見たら、安易に「似得る」が生じてくる境地など、まったく浅い。どんなに修行を続けても無心に行き着かぬ、ただ求め続けるのみ、それこそが無心の真の姿であるという人から見たら、「西平が言っていることは、全然浅い。無心などと安易に言ってもらっては困る」ということになるわけです。

よく分かるのですが、しかしその点だけを強調すると、無心は、私たちの日常生活とはまったく切り離れた特別な人の「非日常」の出来事になってしまいます。せつかくの日本の伝統的な思想が、私たちの日々の生活とまったく無縁になってしまう。それはもったいない。私は「無心の思想」をゆるやかに捉えて、むしろ私たちの日々の暮らしの中で、小さな無心の出来事を大切にしたい。小さな無心を育ててゆきたいと思っているのです。

・「型」、「子どもの身体」、「器」、「曲」

さて、この枠組みを使って様々な機会に、例えば、学校の先生たちに、役者さんたちに、経営者の方々のところで話をし、多様な質問を受けてきました。ここからはその話をします。ということは、ここからは、答えがあるわけではなくて、むしろ何かいいアイデアをご提案いただきたいということなのです。レジュメの3です。

(資料) まず一つ目、「型は子どもの内側からは出てこないのか」という問題。「似する」とは、ある意味では、型に入ることです。例えば、子どもたちが型に入る練習をする。問題は、その時に、型が子どもの内側から出てくるのか、それとも、型は必ず子どもたちの外から、異質なものとしてくる、いわば、子どもたちを「型に入れてしまう」のか。

どうやらこの点は、ジャンルによって状況が違うようです。学生たちは大抵サークルに入っているわけですが、例えばジャズの人と柔道の人とでは、「型」という言葉の意味合いがかなり違う。ジャズダンスでしたか、正確には忘れましたが、子どもたちが楽しく踊っていると、自然に、大人たちが伝統的に伝えてきた型と同じ動きをやり始めるのだそうです。自然に、型が、子どもたちの内側から、生じてくるというわけです。

しかし多くのジャンルではそうはゆかない。型は子どもの内側からは出てこない。外から、親から、先生から、伝統から、いわば押し付けられる、というわけです。すると、この場面における「型」は、いわば内側からの動きを「抑えつける」働きとなります。

## 型と無心—稽古の思想のしなやかさ

クオリア・アゴラ

2015, 12, 17

京都大学教育学研究科 西平 直

### I、「ビギナーズ・ラック」 — 「用心せよ」と「用心するな」

- ・意識に囚われる危険 「一所に心を止める」、「心を取られる」、「心をどこにも置かぬ」(沢庵)

### II、「似する」「似せぬ」「似得る」—大まかな全体枠組み

#### 1、型を学ぶ（「守」、「序」）

「似せる」：意図的な技巧、作為的な工夫。

#### 2、型をやぶる（「破」）。無心に向かう。

「似せぬ」：意図の放棄。作意から離れる。

#### 3、型から離れる（「離」、「急」）。急に（意図せず、不意に）生じてくる。作意ではない。

「似得る」：内側から自然に。然るべき経過をたどって一定の結果に落ちつく。「落居」、「成就」。

### III、そのつど試される諸問題

#### 1、型は子どもの内側からは出てこないか。 「型」⇔「内側から生じる動き」

- ・「内側からおのずから生じる動き」を促す型。
- ・内側からの動きを妨げる型（型に縛られる）⇔ 内側からの動きを促す型（型が身につく）

#### 2、子どもの身体（「児姿幽風」）を「わざの内に残せ」。

- ・型は「下地」がある時にのみ有効か。それとも型は「下地」も育てるのか。

#### 3、芸を習い始めると型を習得することはできないか。

- ・「器（うつわもの）（基礎・基本・土台）」。「器の上に芸を盛る」。

#### 4、「曲（音楽性）」は習うことが出来ない。習うのは「節」のみ。

- ・「節を極めると、曲は、おのずから香り出す。」

#### 5、「似せぬ」。既存の動きが通用しない（困難、ピンチ、挫折）。

- ・無心の知恵は、不測の事態に備える（備えない）。
- ・「身心のゼロポイント」に戻るための稽古。「欲」を濾過する。ゼロポイントからそのつど新鮮に出発する。その時その場に最もふさわしく響き合う身体。即興性を可能にする身体。

\* 「無心を求めること自体に価値がある」。「修証一如」。

ところが、その型を学んで、型が身についてしまうと、今度はむしろ、それが一番楽になります。型に乗ればいい。自分の内側の思いを表現する時、その型に乗って表現する。ということは、この場合の「型」は、内側の動きを「支え促す」働きをしていることになります。

つまり同じ「型」でも、場面によって、意味合いが全く違うわけです。最初に出合う場面は、敵対的と言いますか、子どもから見たら、「型に入るのは苦痛、自由にしたい」。ところが、反復練習によって型が身についてしまうと、むしろ、型こそが内側の動きを促してくれる。敵対的どころか、最も支援してくれる機能を持つわけです。少なくともこの二つの場面を分けて使わないと、型の議論は混乱してしまいます。

レジュメに書きましたが、内側からおのずから生じる動きを促す型、これを「型2」とも言いますか、少なくとも、そうした「型」を、明確に区別しておくべきだと思います。しかしそんなうまく分かれるものかどうか、あとから、みなさんの体験を伺いたいと思います。

二つ目です。世阿弥は、あるところで、「子どもの身体を技のうちに残せ」と分かりにくいことを言いました。(チャートを示しながら)、技が「赤の枠(区切り)」ですが、この時、早く「黄色のぐにやぐにやした動き(区切りなし)」から離れて、赤い枠(区切り)に入れとは言わないということです。そうではなくて、内側に黄色を残したまま技を身に着けよというわけです。もう少し正確に話をすると、前期の世阿弥と後期の世阿弥では微妙に話が変わっているのです。若いころの世阿弥は、早く黄色を捨て去って赤に入ることを稽古の勧めとしていましたが、ある時期から、自分が求めていたこの「似せぬ」の舞が、稽古を開始する前の子どもの動きと同じであると気づいてしまうのです。ということは、稽古(「似する稽古」とは、理想の舞から離れることになる。そこで世阿弥は悩んだわけです。

ここに「児姿幽風(こしゅうふう)」という不思議な漢字が出てきます。「子どもの姿こそ幽玄の姿である」。子どもの動きこそ、最高であることを肝に銘じよと語るわけです。そして先の言葉、「技の中にこの児姿を残しながら技を学んでいく」が出てきます。いわば、半熟卵のように、内側の柔らかさを保ったままで、外側の殻だけ固くする。動きを止めてしまうように見えるけども、それは、実は一番繊細な柔らかい動きを保持するためであるということになります。

さて、問題は「下地」という言葉です。世阿弥は稽古以前に身につけている「下地」を強調します。では、型は、下地がある時のみ有効なのか、それとも、型はこの下地も育てるのでしょうか。

(チャートを示しながら) 今までの話では、当然のように、この「黄色の動き」が前提でした。つまり「稽古の下地」を前提にして話をしてきました。しかし世阿弥のいう「子ども」は、実は一座の子どもに限られているのです。稽古などを始める前から自然と芸に馴染んでいる。舞台も目にするでしょうし、謡も聞く。いわば稽古を始める前から、からだに染み込んでいるわけです。つまり下地がある。ということは、世阿弥の議論は下地が

ある子どもを前提にした場合のみ成り立つのではないかという疑問です。

この点は、例えば、今日「伝統芸能を習う」人たちが語ることでもあります。その場合、下地がないまま、別の型に入ろうとするわけです。例えば、よそからその村に入って習おうとする。その村の子どもたちと一緒に稽古するのですが、村の子どもたちは何故かできてしまう。今の理解で言えば、下地があるから自然に身につくというわけです。それに対して、外から行った者には、その下地がない。というより、むしろ、別の下地を持っていることの方が問題になる。別の下地をもって稽古するから、同じ「型」を身に付けてもどこか違うというのです。

話が厄介になりますが、ある方は、「すべて人の動きは型を持っている」といいます。ということは、「型がない」ところに「型」を学ぶことはありえない。型を学ぶとは、正確には、今まで持っていた型を捨てて、新しい型に入ることである。つまり「型の組み替え」である。そう考えると、「子どもの身体をわざの内に残す」という知恵も、あらためて考え直してみる必要があるように思います。

三つ目に進みます。「芸を習い始めると、型を習得することはできないか」という問題です。世阿弥は、あるところで、「器<sup>うつもの</sup>」という面白い言葉を使っています。基礎、基本、土台の意味です。器の上に芸を盛るのであるから、器を大きくしておかなかったらどんなに練習しても芸が小さくなってしまふ、というのです。ところがその先に世阿弥は「芸を習い始めてしまふと、もはや器を大きくすることはできない。だから、芸を習い始める前にたっぷり器を大きくしておかなければならない」というわけです。

ピアノをやっている人はこの話がよくわかるようです。早くからテクニックを習い始めると、土台を広げることができない。しかし柔道の人などは、技を習いながら土台を広げていくと言いますから、この点もジャンルによって違うのだらうと思います。この辺の問題もご意見をうかがいたいところです。

四つ目の論点です。『曲』は習うことはできない。習うのは『<sup>ふし</sup>節』のみ」という点。「曲を極めると、曲は自ずから香り出す」。能という芸術において一番大切なのは、この「曲」とよばれる、言ってみれば「雰囲気」です。一曲が持っている固有の雰囲気。ところがその雰囲気は、師匠から習うことができない。なぜならこの「雰囲気」は、節としては表現できないから。例えば、名人の持っている独特の雰囲気は「楽譜」に書き写すことができないから、教えることも習うこともできない。「曲」は師匠から習うことができない、と断言するわけです。

そのかわり「節」を習うことができる。そして節を習い窮めると、曲は、おのずから香り出す。その出来事が大切であるというわけです。世阿弥は稽古を強調しますが、同時に、稽古の限界を見極めていました。稽古の及ばぬ地平を見ていた。習うことができない。教えることもできない。ただ稽古を極めた者の内側から、おのずから生じてくるという仕方でのみ「香り出す」。その地平を見ていたことになります。

## ・「無心」の意味

さて、最後に、あらためて「似せぬ」、あるいは「無心」の話に戻ります。いろいろな方と話をしているうちに、私は「無心」を、「既存の動きが通用しない」場面と重ねて理解することはできないかと思うようになってきました。

「既存の動き」というのは「似する」です。習うこともできるし、自分で意識し工夫することもできる。ところが、それがもはや通用しなくなったときの問題。禅の方々は一生涯懸命に座禅を組んで、いわば、強制的に無心の境地を追究するわけですが、私たち凡人は、むしろ「行き詰まる」とか「挫折する」という仕方で、望んだわけではないのに、「似せぬ」を体験することになる。ということは、その「挫折」が大切になる。挫折した時を、どう過ごすか。もしかすると、その時を、上手に過ごすと、新たな動きが生じてくる。「似得る」がやってくる。

もちろん、ただ挫折して待つていればよいというわけではないでしょうし、むしろ、それまでに、どれだけ稽古を積み重ねてきたか、それが、この場面で試されるということなのだと思います。

後で、山口さんからお話を聴きますが、先日「イノベーションダイアグラム」を見せていただいたのです。ごく簡単に言いますと、既成のモデルから一度離れた人が独自に暗中模索を続けていると、不思議な仕方で、新たなイノベーションが成り立つことがあるという話。既成のモデル（パラダイムという言葉でしたが）、その中から、そのまま、新しい発見があるのではなく、一回、そこから離れることによって初めて、「イノベーション」が成り立つというわけです。その話を聞いた時、私は「似せぬ」の智慧に似ていると思いました。この「似せぬ」の期間が、「創発 Abduction」の期間になるのではないかと。

しかし、世阿弥の話も山口さんの話も、その先に「似得る」が想定されています。その先の「似得る」があるから、「似せぬ」の意味がある。ところが、ある時、この点について、臨床心理学の先生から質問されました。そのまま「似せぬ」に居続けることにも意味があるのではないかと。例えば、臨床心理のクライアントの場合、ずっと「似せぬ」状態が続く可能性がある。芽が出ないかもしれない。しかしそれでもよいのではないかと。むしろそこに意味を見ようとするこそ大切ではないかというわけです。

芽の出ない「似せぬ」にも意味があるのか。そう思ってみれば、無心の思想は、実は、芽が出ないことそれ自体にも意味があると教えているように思います。無心に留まっていること、それ自体、大切である。しかしだからそこに留まってよいとは言いません。おのずから、芽が出てくると言います。おのずから、香り始めると言います。しかしそのための準備なのではありません。「似せぬ」ことそれ自体に意味があると語るのです。

無心の思想の魅力の一つは、花を咲かせるために無心になるわけではないという点です。無心になること、無心を求めること、それ自体に意味がある。それ自体が輝くことである。その点が私にとって励ましなのです。



時間も尽きましたので、ディスカッションにつなぎたいと思います。ありがとうございました。

## クオリア AGORA2015 第6回

2015年12月17日 於 楽友会館

### ☆テーマ

「“無心”から “生きる”を考える」

### ☆ ディスカッション

#### ☆ディスカッサント

JT 生命誌研究館館長

中村 桂子さん

京都大学大学院思修館教授

山口 栄一さん

武庫川女子大学名誉教授

高田 公理さん

◇ ◇ ◇

京都大学大学院教育学研究科教授

西平 直さん

#### ☆モデレーター

写真家

荻野 NAO 之さん

#### 荻野NAO之 (写真家)



きょうは、すでにたくさんの問いを直接出していただきましたので、お三方の印象に残った問いについて、それぞれのフィールドからお答えいただきながら、議論を深めてまいりたいと思います。で、私も、それを、横でぼーっと聞いているだけでは何なので、いただいた問いについて、私なりにお返ししたうえで、みなさんの議論に入っていきたいと思います。

私のバックグラウンドについて、恐縮ながらお話しすると、私は、東京の杉並区で生まれ、3歳で、父親の仕事でメキシコに連れていかれました。何となく、私の記憶は3歳から始まるんです。当然、現地校に入り、スペイン語で教育を受けるわけですが、帰国するころに、ある時、母親が「あなたは何語でものを考えているの」と聞いたそうです。すると、私は、なぜ当たり前のことを聞

くんだというような顔をして「スペイン語に決まっているじゃないか」と日本語で答えたそうです。つまり、私は、日本語で聞いて、スペイン語で解釈をして日本語で答えていた。それで、7歳の時に、日本に帰ってくるんですが、3か月で、そのスペイン語を見事に忘れてしまいました。覚えているのは「amigo（友達）」ともう一つ、大好きだった「gelatina（食べるゼリー）」の二つだけ。1、2、3も言えなくなった。

10歳の時、もう一度メキシコに行くことになるんですけども、その時に何が起こったか、今の西平先生のお話にちょっと通じるかもしれません。母親は「あれだけスペイン語を話していたんだから、すぐに思い出すわよ」と言いました。が、何と、結局、それから5年もかかって徐々に覚えたんです。ただ、最初のところ、何が起こったかという、1回、スペイン語の単語を覚え、それを話すと、どうも、初音は完璧にメキシコ人である、と。一方、日本人の私の母親が一生懸命スペイン語をやっても、ただの日本人のスペイン語なんです。つまり、何が起きたかという、これが大変だったのですが、まだ、「Buenas Tardes（こんにちは）」「Mucho gusto（初めまして）」程度の会話しかできないのに、新しくメキシコ人に会って、そう言った瞬間、向こうは、ぼくのことをネイティブとってしまうんです。ブワーっとしゃべってくる。ぼくが、理解できないでいると「何でお前はわからないのか。嘘つくな。発音は完璧じゃないか」という。

それ以来、まあ、そうやってメキシコ人と同じように遊んだりして暮らしたわけなんです。発音が「型」ということになるのかどうかわからないのですが、スペイン語力が全くなかったのに、3歳から7歳のことのおかげで、10歳の時にそういうことがあったんですね。直接結び付くかどうかかわかませんが、さっきのお話を聞いていて、この10歳の時の実体験を思い出して、型とか無心についてそういうことだったのかなと考えていて、何か参考になるかと話してみました。では、それぞれのディスカッションのお考えをお聞きしましょうか。

#### 高田 公理（武庫川女子大学名誉教授）

お話、とっても面白く聞かせてもらいました。ありがとうございます。ところで、西平さん、「無心」という日本語を、英語では何というんですか。



#### 西平 直（京都大学大学院教育学研究科教授）



それは、本当に困るんです。定訳がないです。

#### 高田

同じような例は、いろいろありますね。ぼくの研究対象の一

つである「嗜好品」も、英語やドイツ語には適切な訳語がありません。で、「無心」を英語やドイツ語の話者たちに、どんな単語で伝えられているのか。荻野さんの話ともリンクしそうなので、お聞きしたわけです。

## 西平

鈴木大拙が最初に試みたのは「No Mind」という言葉でした。それで、ずいぶん誤解を招いてしまい、ある時期から「Mind of No-mind-ness」という言い方をしたり、ある時期は「Mushin」と書いたり、…。意味内容では「innocence」とか、「selfless-ness」とか……。もう一つ、大きな誤解の元となったのは、「Unconscious」という言葉を使ったことです。「無心」と「無意識」は全然違います。

## 高田

なるほど、適切な言葉がないんですね。

## 西平

ないんです。「Let it be」と訳している方がいて、うまいなと思いました。

## 高田

それをお聞きして思い出したことが二つあります。

まずはディズニーランドには、舞台上歌や踊りなどの芸をする「キャスト」と呼ばれる人がいます。彼らが一生懸命、練習を積んで芸に熟達する一方、初心を忘れたと判断されると「クビ」になるんだそうです。つまり、多少下手くそでも、初めて舞台上上がった時の初々しい気持があると、見る人の心を動かせる。が、そういう気持を失うと、観客が心を動かさなくなる。だから、ただ技量だけが上がっても、初心を忘れてしまうと、舞台上立つのを辞めさせるんだそうです。で、あらためて初心にもどる訓練というか、指導を試みる。そんな不思議なことが行なわれているという話を聞いたことがあります。

もうひとつ、思い出したのは、日本初のノーベル賞受賞者の湯川秀樹さんの最後のころの講義を受けた印象です。湯川さんが教壇で話し始めたとき、とっさに思い出したのが、横山大観の「無我」という絵だったんです。ちょっと不謹慎なんですけど、その絵柄は、両手をだらんと下ろして、ぼーとした表情でたたずんでいる着物姿の、知恵遅れみたいに見える子供でした。そこには文字どおり「無心」の雰囲気が漂っていたように思います。

いうまでもなく湯川さんは中間子理論でノーベル賞を授与された物理学者です。で、ふだんは枕元にメモを置いておくなど、一生懸命に思考をめぐらしておられたのですが、なにか大きな、決定的な発見をなさったのは無心の状態だったのかなあ、などと考えてしまったわけです。そういう雰囲気が湯川さんの姿には確かに漂っていました。

そういえば昨年、やっぱりノーベル物理学賞を受賞された梶田さんも、ニュートリノに



るいは「価値の創造」です。真ん中に横線を引いて、その線の下は没価値的世界です。これを土壌 (Soil) と呼んでおきます。土壌の上は価値づけられた世界です。

さて、私たちは必ず、先ほどのお話に出てきた「型」からものごとを始めます。この「型」とは、パラダイムのことです。私たちは、型から出発して、論理的な思考の枠組みに従って知を演繹的に具現化していきます。つまり A から A' に行く。私たちは、常にまずこういう演繹行動をするわけです。こうして、価値づけられたあるものが生まれます。これが「技術」です。例えば、A のところに電子回路やトランジスタがあるとすると、これをもっといいものにしたい。ということで、演繹的に上の方に行くわけです。これは「似する」ですね。ところが、これは、必ず行き詰まります。日本企業の悪い癖は、それでも、がむしゃらに、まだ上へ、上へと演繹的に行こうとすることです。

では、行き詰まったらどうすればよいか。S に降りるんですよ。演繹の逆作用なので、帰納です。いったん行き詰って挫折を味わった人間は、帰納的に降りて行った時に、違うパラダイムを求めます。そうして創発をする。これこそが「似せぬ」だと思います。これで P つまり新しいパラダイム=新しい型が見つかり、ここからもう一回這いあがることによって、新しいイノベーション A\* に達する。これが「似得る」だと思います。花が咲く。イノベーションダイアグラムでは、この A\* のことを「パラダイム破壊型イノベーション」って呼んでいます。大事なことは既存の技術「似する」を突き詰めていって行き詰まったところ A' から、「似得る」のところ A\* には直接行けない、という点です。土壌の下にいったんもぐらない限り、土の中にある P からしか行けないんです。

つまり型を演繹的に勉強しているだけでは A' にしか行けず、いったん、土の中 S に帰納的に降りた者だけが、パラダイムを破って創発に至り、「似せず」という全く新しいパラダイム P に達することができ、そして A\* つまり「似得る」へ行けるんです。

それから「花を咲かせないこと、無心であることに意味を見出す」というのは、まさにサイエンティストの生きがいだと思います。サイエンティストは案外、花を咲かせて新しい価値をもたらすということ、あまり求めていない。むしろずっと土壌の中を横に横に進んで、新しいパラダイム P を見つけることのみ生きがいを見つめようとしているのだと思います。

#### 中村 桂子 (JT生命誌研究館館長)



西平先生のお話で、子どもという言葉がキーワードとして出てきました。実は、その更に先に動物がいるわけです。おそらく無心でしょう。彼らに心があるかというのはひとつの問いですが、恐らく、私たちの心と通い合うものはあると思うのです。いつも動物の方を考えているものですから、それと結び付けて考えてみます。世阿弥で「似する、似せぬ、似得る」というところ、これは真似るとすると、動物はできるのです。

しかし、動物にできないことがある。みなさんよくご存じの松沢（哲郎）さんの研究で、人間以外にできないことが分かったのが「教える」ということです。そこで、世阿弥のお話の中には「教える」はないんでしょうかというのが私の問いです。世阿弥は「似する」「似せぬ」と言いきっているけれど、「どこにも教えるという感覚はありませんか」と伺いたい。チンパンジーのアイちゃん、とても賢くて学びます。でも、教えることはしないそうです。今のお話をうかがっていて、まず、この教えるということはないのだろうかというのが、感じたことでした。

それから、もう一つ「型」です。若いころ、少しお茶をやっていて、教えられた時、「型だ」と思っていました。けれど、ある程度やって、特に、私が、科学を勉強するようになってから、「この動きは何て合理的なんだろう」と思うようになりました。もうほとんど、次何をやるか、ここに何を置くか、という動きが、もうこれしかない。順番にやるとしたら、ほかのことは絶対できないということになっていることに気がついたのです。おそらく、積み上げ、積み上げやってきた型というものの中には、先ほど、押し付け、内側の動きを妨げるとか、促すとかおっしゃいましたけれど、おそらく、ずっと残っているような型は、とても合理的なんだと思うのです。

人間って、やっぱり合理性が好きなんです。サイエンスは因果を求めますが、科学でなくても、人間は合理性が好きで、それがあると安心すると私は思っているんです。だから、型の中には、この合理性が入っているのではないかと思いついて聞いていました。

## 西平

今の中村さんのお話の最後の「何て合理的なんだろう」という箇所、そうなんだろうと思います。「型に縛られる」という言葉で理解される「型」のニュアンスとは、だいぶ違いますね。合理的っていうのは、四面四角だったら合理的ではないですよ。このくにやくにやしている命の営みを、それ相応に形にするわけですから。柔軟である、しかし、あるところを超えてはいけないということを、蓄積の中でうまく残していくのではないかと、思うんですよ。科学の言葉では、何というのでしょうか。揺れることはできる、でも、これ以上揺れてはいけません。ですから型も幅を持っているように感じているんです。

## 中村

生き物はそうですね。揺らぎの塊、矛盾の塊ですけども、ある制約はあり、それを超えることはできない。例えば、赤ちゃんが生まれてきますね。その時、鼻が高いとか、低いとか、いろいろな性質を持っている。更には、指が少ない場合もあります。けれども、私は、生まれて来たら、これは完璧な存在なのだと思うのです。生まれられない個体がたくさんあるわけです。だから、生まれたということは、今おっしゃった、「枠」、人間として存在しているよという枠の中にいる。これ以上外れたらだめという時は、生まれてこられない。そういう場合の方が多い。生まれていいよ、生き物として生きていいよという幅

が、あるのです。ですから、今ここに存在しているのは、いいよと言われた存在なのです。揺らぎと幅とが、具体的にはそんな形で出ているのです。

### 高田

中村さんのお話を聞いて面白いなと思いつつ、少し別のことを考えました。それは人間も、ほんとは教えるということができていないのではないかということです。今ひとつ、チンパンジーも習うことはできるんですね。が、彼らが子供たちに教えることはできない。

### 中村

そう、習う、学ぶ、この「似する」ができない。

### 高田

でしょう？ つまり世阿弥は「曲は習うことも教えることもできない」って言ってるんじゃないですか。で、習うことができるのは「節」のみ。節は異なった周波数の並びですから、そのまま簡単に楽譜に書ける。だけど、それを見て演奏しても、人によって、すごい演奏になったり、凡庸な演奏になったり……この違いというか、「曲」を「演奏の仕方」と単純化しても、それは教えられないし、習えない、ということではないでしょうか。で、おそらくそれは、それぞれの人が持っている、体や気持の状態から滲み



出てくる、ということなのでしょう。

そういえば人間の体調を示す指標の一つに不整脈があります。極端に脈が乱れるのは、なにがしかの病気の結果だとされる。ただ、これとはまったく逆に、脈が非常に正確に均質に打ち始めると、だいたい、その人は死んでしまうんですね。元気な人の脈拍は、いわば  $1/F$  の揺らぎを刻んでいます。そういう揺らぎのなかでこそ、生命は維持されるのだというわけです。

で、ここで言いたいことを短く表現しますと、ぼくらが「教えられる」と思っているのは、そういう幻想を持っているだけなんだということではないかと思います。

### 中村

私も、実は、そうではありませんかと言いたかったのです。人間だけが教えられると言

って、教育科を作っているけれど…本当にそんなことができるのと言いたかったのです。人間は、学校を作り、教育をしているけれど、教えるとはどういうことなんですか、それができることですか、喉まで出かかっていたんです。

## 山口

教えることの可能性について論じてみたいと思います。さっきの図（イノベーション・ダイアグラム）でいうと、この  $A \rightarrow A'$  が「似する」ですね。教育は何をしているかという、ずっと、この演繹を教えているのだと思います。

教育にとって厄介なのは、創発、Abduction です。Abduction は演繹的に教えられない。「節」は教えられても「曲」は教えられない。創発はまさに「曲」です。ところが大学院では創発を教えなければいけない。例えば博士。博士は、研究して、誰も知らないことを知ること、見たことのないものを見ることですから、まさに創発です。これ、教えられないことですから、ここに大学院という教育機関の自己矛盾性がある。それで、私の逆説的な問いかけは、教えることのできない「創発」をいかに教えるのか。それが、大学院というものが持つジレンマなんだろうなと思います。

## 高田

それを、非常に短い言葉で捉え直すと、かつて日高敏隆さんがおっしゃったことにまとめられるかもしれません。つまり日高さんは滋賀県立大学を立ち上げるとき、「学生を育てることはできない。だけど、彼らが育っていく環境を作ることはできる」と言い放ったんですね。

## 中村

これも、松沢さんがチンパンジー研究で気づかれたことなんですが、人間だけがするのはイマジネーション。

イマジネーションは人間しかできない。結局、創発とか創造は、私は、イマジネーションからしか生まれないと思っていて、じゃあ、イマジネーションは教育できるかという、そんなことできるわけない。そこで、日高先生の言葉のように、イマジネーションができるような場所を作っておくというのが、もしかしたら教育の場なのではないかと。教育を否定するわけではありませんが、そんな気がします。すみません、教育学っていうのはあるんですよね。

## 西平

折角、教育学に言及していただいたので、ちょっとお話しします。教育学というと、普通、「教える技術を学ぶ学問」と思われています。そして確かにそれが中心ですが、その意味では、ぼくは、教育学から、はみ出しています。むしろ、「教えられないこと」がとても気



になるんです。ところが、教育学の教員として飯を食っているのに、教えるということを無視することはできないわけですね。つまり、「教えることができないはずのこと」をどうやって教えるか。

「教えることのできない領域」について、例えば、イメージーション育てるとした場合、何が出来るか。何が助けになるか、あるいは、せめて何はしない方がいいのか、そういうことを考えるわけです。

### 中村

最低限、何かやらなければならないことがあるんでしょうね。

### 西平

そうなんです、そうなんです。放っておけばいいとは思えない。

### 山口

なくとも、そのアブダクションを経験してパラダイムを突き抜けた人間がいて、学生たちは、その人間の人生を見てないといけない。このA'に演繹的に行けたら教育は終わりなんだっていうのじゃ困っちゃう。

### 中村

だから、湯川先生がいてくだされば、「真似る」でいいんですね。教えてくださらなくても、真似ればいいんです。

### 荻野

みなさん学術、学芸を極められた型の討議なので、このままで、ずっと聞いていたい気もするんですが、やはり、この、きょうのテーマに落としていかないといけないんですね。それで、ちょっと、落とすつもりが、すごく抽象化しちゃうかもしれないんですけど、今のお話を受けて、何が、一番広く一般の人たちの共通項に入るんだろうかと思った時、「人生を教えることはできるのか」ということが言えるのではないのでしょうか。よく「自分探し」ということが言われます。何故かこの二人を、例えば、写真家をめざしているという人が私のところに訪ねてきて、「写真家になるにはどうしたらいいか」って。なりたかったら、なれてるのでは、と聞くと、撮りたいものも決まってないので、という。撮りたいものがわかってないなら、写真なんかやらなければいい。この場合、写真家とか、やめればいいじゃないで済むんですね。お能も学問もわからないならやんなきゃいい、といえる。でも、人生は、「やんなきゃいいじゃない」とは、なかなか言いにくい。

それで、大変難しいかもしれないですけど、教えることができない人生、でも、迷っている人たちが多き時代に、この後の人生を発見するための「場」を整える、もしくは、こ

の山口さんのお話に出た構図を使って、人生を発見する何かを創造できるのか、そう言った「工夫」はあるのか、人生に悩んでいる、戸惑っている現代人に、「無心」という言葉でどうやってアプローチするのか、みなさんのお話を聞きたいと思います。

## 山口

私は、横に行くアブダクション、このメカニズムのことをブレイクスルーというわけですが、じゃあ、「人生のブレイクスルー」ということにしましょうか。人生のブレイクスルーというのは、要するに、自分の持っていたある種のパラダイムを壊すことですね。どうやったら壊せるかっていうのは、結構、今回のワールドカフェでは面白いテーマになるだろうなと思います。あのう、お年を召した型は、何度もそういうことを経験されていると思いますので。

一言だけ、言うとする、堀場雅夫さんがいつもおっしゃっていた教えがいくつかあるんですね。その中で、これいいな、人生のブレイクスルーがあるなあ、と思うのがあるんです。それは、「人生は櫃まぶしだよ」という言葉です。ご存知ですか。私はある時、堀場さんとお話したことがあるんです。それは、「私、40歳の時に、今までの人生をちょっと捨ててみよう」と思い、会社を辞めて、完全なフリーランスになり、そして、まったく違うことを始めた。すると、新しいドアが開いて、そこに入ってみたら、まったく違った風景が見えた」ということを言ったんです。すると、堀場さんはニヤッと笑って、お前は、まだまだ若い。まだ2回しか楽しんでない。人生は3回楽しまなければいけない。40歳でブレイクスルーが必ずあって、人生はブレイクスルーしなきゃもったいない。60歳でまたブレイクスルーしろ。人生は櫃まぶし、3回楽しめるとおっしゃったんです。これどうでしょう。

## 高田

ぼくの場合は、ひたすら無計画、ですね。まあ、その場その時のなりゆきだけでやって来たので、偉そうなこと言えません。という意味では「無心の状態」でこれまで暮らしてきたとも言えようかと思います。

## 荻野

高田さんにとって、ブレイクスルーって、あれがそうかなっていうのはありましたか。

## 高田

ブレイクスルーなんて、なかったと思います。大昔に流行った歌謡曲の「侍ニッポン」の歌詞のように「その日その日の出来ごごろ」でやってきたのが、今の今までつながっているんでしょう。ぼくの場合、卒業したのは理学部なんですけど、卒業直後はトラック運転手、以下、大工の下働きをしたり、酒場を経営したり……余り何も考えずに今日まで来た

ように思います。ただ、その時その場では、何とか食えるようにする必要があったわけで、結果、こういうことになったわけです。そういう意味では、やっぱり「無心のままで来た」というほかなさそうですね。

## 山口

大学を出た時からが、その瞬間がブレイクスルーじゃないですか。

## 高田

ああ、そうか！ そうかも知れませんねえ。

## 荻野

中村さんいかがでしょう。

## 中村

私は、今しかない。今が一番好きなんです。未来をどうしようと考えたこともないし、過去も考えない。ただ、みなさん無心、無心っておっしゃっているのを伺っていて、「<sup>いそがしい</sup>忙」という字を思い出していました。これは心が<sup>ない</sup>亡って書きますね。無心って言うのととてもすごいみたいだけど、この「心がない」は、今の社会、とても忙しい。この忙しさに、みんなもう、何か潰されていると思うのです。それは、心をなくしていることだと思うのです。私は、今が好きで、日常さぼろうとかは思わないでやっているのですが、その時に、みなさんに忙しいと言われると、とても嫌なんです。「私は忙しくない」という。どういう状態が好きかという、やることがたくさんあること。だから、私は、忙しいという言葉は使わないで、「きょうはやることたくさんある」と言うんです。

それで、今を大事にする。ほんとに、日常的にやることがたくさんある状態で、それを一生懸命やるということが、わたしにとっては生き甲斐。忙しいと言わないで、やることがたくさんあるという状況が、私にとっては一番楽しい生き方だと思っています。だから、あんまり難しいこと考えませんし、ブレイクスルーをしようとか、そういうことは考えたことがない。でも、やることをやっていると、まあ、何ができるかはわからないけれど、きちっと生きるということだけはできますよね。何かができるとか、そういう問題ではなくて、きちんと生きるということが出来ます。それをやっていると、いやになるとか、そういうことってないんじゃないかなと思うんですけど…。

## 荻野

「忙」をそういうふうな意味で使っていらっしゃる方がいるかどうかわかりませんが、では、心をなくしてしまっている人たちは、なぜ、そうなるのでしょうか。なぜ、そんなことになるのか。中村さんは、それが無いようですが。

## 中村

「忙」はあえて、それは使わないようにしているんです。この字が嫌いだから。それにしても面白いですね。無心はよくて、心をなくすのはいけないって。

## 荻野

西平さんいかがですか。

## 西平

折角今、「忙」、「心がない」が出てきたので、その問題に重ねるのですが、「無心」という言葉は、普通、あたかも「よいこと」のように語られますね。ところが、「無心」という文字は、心が無い、例えば「心無い人」というのは、ひどい人を意味します。「心ある人」の方がいいわけです。

つまり、「心ある」ことが、一方ではよいことであり、一方ではそれこそが、苦しみの元凶である。心という言葉が両面を持ち、それに対応して、無心という言葉も、一方では良い意味で使われ、他方では否定的な意味で使われます。例えば、古語においては、「心無い」という意味でした。その用語法がかりうじて残っているのは「お金を無心する」という表現です。厚かましくも、とか、相手のことも考えずに、という意味での無心。無心という言葉は、このように、それ自体いろいろ混ざっていて面白い言葉だと思います。

それで、迷った方のことなんですけど、…、迷っちゃう人は迷っちゃうんですね。例えば、今、中村先生が「今が大事で」とおっしゃられたように、今をそのまま生きることができるタイプと、他方では、一回そこから滑り落ちて、滑り落ちた後からでないと「今」を体験しないタイプの人もいるわけです。哲学のような領域に関心持つのは、後者のややこしいタイプの人ですぼくは、やっぱり、この「無心」のところにいることの意味をもっともっと、大事にしたいと思います。芽が出る方は測定がしやすいし、発信しやすいですけど、「無心」にいる時は「引きこもり」といわれたり、アピールが足りないとか言われてしまう。だからこそ、この「無心」にいることの意味をもっと大切にしたいというふうに思うんですね。

## 荻野

では、この辺で会場からのご意見をうかがってみましょう。



## 阿部 久恵（京都大学大学院思修館）

ひとつは、忙しいということ、心がない、無心の話なんですが、アメリカで、戦争から帰ってきてトラウマのある兵士に、精神科医は「多忙にしてください」

とアドバイスしたそうです。スケジュールをびっちりにして考える隙間を与えないことで悩みを克服するよう言ったわけですが、これを知って、現代人にとって、忙しいというのが、必ずしも悪いことではないんじゃないかと思いました。

質問ですけど、さっきの「下地」の部分の話です。子どもの振る舞いが基本で、上達していくにつれて、「似せぬ」の部分になった時、動きが同じになり、それが究極的な目標であるとおっしゃったと思うんです。では、その後、「似得る」になった時、元の子どもの動きがなくなってしまうんじゃないか。

## 西平

とっても厄介な問題ですが、「似得る」は二重だと思います。二重というのは、中にずれを含む。それに対して、子どもの時の動きは「ずれがない」と。だから「似得る」では、ずれを背負い込むという仕方で、子どもの時の動きを表現する、というしかない。ずっと、子どもの時の動きをそのまま持続させるというのは難しいように思います。

## 山口

そうだと思いますね。多分2種類あって、「似得る」=A\*をゴールポイントとしている人間と、「似する」=A'をゴールにしている人間がいると思うんですよ。

## 高田

その回路を、らせん形で考えられませんか。さしあたってのゴールに到達すると、そこからレベルが変わって、より高いレベルの新しいらせん形を辿るようになる。そういう構造を考えると、「似得る」に到達しても、また新しい初期状態に戻ると考えればいいわけです。そういうらせんモデルを想定すると、未来永劫に遊んでいたらよろしいということになって、たいへんハッピーだという気がします。

それと、蛇足ですが、さっきの忙しいという話——ぼくも「お忙しいでしょうが……」などと言われるのですが、そういうとき、「いやあ、ぼくは暇ですよ」と応えています。と、いいつつ、やることはいくらでもあります。「似得る」ところまで行くと、さらに上に行ったり、あるいは下にいたり……いろんな可能性が残されていますから。

## 西平

「遊ぶ」という言葉がでましたけど、ぼくは、自分の中の相反するものっていうか、葛藤みたいなものの方に目を向けてしまうのです。ですから「螺旋的に」うまくいくっていうより、常に逆の動きが生じて、引き裂かれていくという方が、納得いくっていうのか、安心できるのです。

## 中村

私に生き物って何ですかと聞かれたら、「矛盾の塊」と答えます。だって、多様で共通とか、相反することを全部抱え込んでいるのが生き物なんです。矛盾がなくなった時は、死んだ時です。生きることをやめたら矛盾は消えるんです。

だから、西平さんのお気持ちわかるのですけれど、私から見ると、それをなくしちゃったら生きていくということにならないと思います。多分、大人になるということは、青の重なりを自分の中に抱え込めよということだと思っているのです。それがあってはいけな  
いとなると、大人になれない、っていうか、生きていけない。

全く子どものままで、私もそんなところがありますが、まったく子どものままではいか  
れないでしょう、社会では。すると、二重になりますよ。二重にならないと生きられない  
でしょう。これをつらいと思ってしまうと。とても大変だけれど。ほかの生き物を見ても、  
みんなそれをやっているから、これが生きることなんだと納得してしまいます。これが、  
生物学をやっているメリットだと思っています。

## 山口

あの、ひとつだけ、あえてアンチテーゼを投げかけると、おそらくは、99%くらいの人  
間は、「似する」=A' で止まっています。だから、パラダイム破壊の後の世界に行けてい  
ない。だから、「似せず」=P と「似得る」=A\*に行くっていうのがどういうことかとい  
うのが、すごく大切な考察だと思いますね。

## 萩野

私が、もっとも残念に思っているのは、自殺をしてしまった二人のことです。ひとり  
はダイバーのジャック・マイヨール。もうひとりが、作家のアーネスト・ヘミングウェイ  
です。両方とも会ったことないんですが、自分が写真をやっていくんだとすると、何故か  
この二人を、目指すんだと思うんですね。彼らの世界観、彼らの到達点。二人とも「青」  
の段階だと思いますが…。この私の大好きな二人が、ともに、自殺しちゃったんですね。こ  
れ、明石家さんまさんだったか、桂枝雀さんだったか、「人間はあそこまでいくと、死んじ  
ゃうんだ」とおっしゃっていた。さんまさんは、「そこまでいかないようにしている」とお  
っしゃっていたように思います。私は、実は「青」いところが怖いんです。まあいけない  
んですけど、そこはすごく怖いところで…。西平さんとしては、目指すのはあの「青」の  
ところですか。

## 西平

まあ、そうですねえ。困りました。それと先ほど「自殺」という言葉が出てきましたけ  
ど、その言葉で、全部まとめてしまうのはどうかなと思います。もっとそこには多様な厚  
みがあって、例えば、「自分で去っていく」という事態もありうるもののように感じてい

ます。

## 萩野

はい、ありがとうございます。残念ですが、もう、時間が来てしまいました。それで、この後のワールドカフェのお題なんですが、今の流れのまま、きょうのテーマそのまま持ち込んで、お話しいただきたいと思います。ありがとうございました。

(編集 辻 恒人)

## クオリア AGORA2015 第6回

2015年12月17日 於 楽友会館

### ☆ テーマ

## 「無心」から “生きる” を考える」

### ☆ ワールドカフェ

無心、世阿弥の「似する」「似せぬ」「似得る」などから、私たちはどのように生きるのか、生きている課題の解決は、等、ワールドカフェではいつものようにテーブルを囲んでワイワイガヤガヤと刺激的なひと時を過ごしました。

### ▽第1グループ報告 大西 信徳（京都大学農学部3回生）

ぼくらの議論は、自然と生きること、それと幸福の観点も含めて考えてみました。先ほどの図なんですが、多くの方は「似する」の部分にとどまっているわけです。なぜかという「似せぬ」の方に行くには、運とか大きなリスクとか関係してくるので、基本的には、この似するの部分にとどまっていて、サラリーマンとか、大概の方はここにとどまっている。というのも、ここってというのは、収入も安定していて、ある意味、幸福な部分であるかもしれないからです。

芸術家のような一部の人は、ブレークスルーをするところまで求められるケースが多いので、必然的に、「似得る」を目指さなければいけない。似するから似せぬにいくためには、運もあるし、知識を知恵にするということもあって、これも、なかなか難しいと思うんですけども、そこから最後の似得るというところまで行くのはごくわずかな人。ただ、ここに行くことが必ずしも幸福かという、そうでもないわけで、生き方ということを考えるならば、別に、似するのところでもいいのか、っていう話をしました。

## ▽第2グループ報告 鈴木 祥大（京都大学経済学部3回生）

最初に出てきたのは、「無心」という言葉に対する違和感です。まず、心を言葉に字としてあらわれ意識している時点で、無心という言葉にはちょっと遠いのではないかと。

## 横谷賢一郎（天津市歴史資料館学芸員）

私、禅僧の墨蹟調査していますが、お坊さんが「無心」という墨蹟を書いて残したのを見たことは、いまだに一度もない。お坊さんは、大概「無」とか「空」とか書きます。「無心」って結構、禅的な響きのある言葉なんですけど、実は、お坊さんから見ても、かなり変な言葉とちがうかなあ。実は無になれてない。お坊さんが目指す、無とか空とかとは、かなり異質な…。結構、心の認知の動きが残っている。そういう点では、なり切れてないのが無心なのかな、と。

## 伊藤 献（大阪大学博物館研究員）

少し補足しますと、まあ、瞑想とかやっていたこともありまして、実際、無心っていうのに、私もすごい違和感を覚えました。で、先ほど、「空」っていう言葉が出たんですけど、空っていうのは、ただ見ているっていう感覚なんですね。そこに、心はありません。だから、その違いっていうのは、とても重要やないかという話がずーっと出ていました。

## 横谷

アールブリュットっていう分野がありますね。知的障害者の方が表現する芸術分野ですが、あれこそが、無垢な感覚をダイレクトに表現していると専門家が言って、そういう芸術表現っていうことを、うたい文句にしているんですね。でも、私から見ると、アールブリュットっていうのは、典型的な「型の反復」。もう、型以外の何物でもない。無心やと思ったら大間違いです。言ってみれば、一番、反復的な公務員のような仕事ですね。作風に全くブレがない。

## 鈴木

えー、そうこう、いろいろ話して、インドで修行された方の話から、宗教と経済というところに行きつきました。資本主義のところと言うと、普通であるっていうことが、高度経済成長期はそれでよかった。でも、低成長、人口減の今は、普通であることを追い求めてもしょうがない。そして、民主主義というところの副作用とっていいのか、自由、選択肢があるというところで、みんな迷っているのがでてくるのかな、と思います。そして、その迷いを取り去るために出てきたのが、敵を作ることによって、選択肢が見えない中で選択肢を作っていこうっていうところがあると思いました。

最後、中村先生のお話で「忙しい」ということについてでした。忙しいということに対



する一般のイメージは、押し付けられていて、楽しいところがないってところがある。でもそうではなく、中村先生は、まあ、豊かな生活に慣れ切っているところで、些細なことの中に、面白いことを見出すことによって、まあ、実質的にはやることもたくさんあり、それを一生懸命やることで、幸せっていうものが出てくるのではないかっていうことでした。

それから、スポーツに関しても、無心と「ゾーンに降りていく」ということ。技術というものは必要不可欠ってところで、一生懸命に練習をする中で、面白いことを見出しやり続けることで上達していくと、楽しむことができ、それが、ゾーンに入ることにつながるのではないかと。

宗教で言うと、日本人は自然が好きで、これをよりどころにして、自然に感謝して、面白いところ、幸せを見出すことをやってきた。この精神活動、スタイルが、技術、型を深め、無心というところで生きていけるんじゃないかなという話をしました。

### ▽第3グループ報告 伊藤 早苗（京都大学文学部3回生）

最初に、型には内的必然性があるよね、って話をしました。私は、クラシックバレエと居合道とかやっているんですけども、型を教わることが多くて、型を考えていくと、華道でもそうだと思うんですけども、合理性がすごいあるんですね。型には、そうなるべくしてあるって、必然性ってのがあっていう話になりました。

その後、学問に型はあるのかを話しました。勉強と学問の違い。中等教育では、型を押し付けるみたいな感じだと思うんですけども、学問にすると、型を無理やり押し付けるってことではなく、何か地道にやっている時でも、「降りてくる」感じっていうか、無心になる瞬間があるみたいな感じがあって、それがなんかブレイクスルーっていうか、発見がある時だと。そこに何か楽しさがあって、型ではなくて、何かその降りてくる感じのところに、楽しさも湧いてくる。

で、型にこだわるのがどうなのかと考えた中で、先生は、型のないところでやって来て、回り道には回り道にしかない、いいところがあるってお話しになり、それで、型はなくてもいいんじゃないかなって感じで納めました。

### 荻野NAO之（写真家）

中村さん、西平さん、最後に一言だけ、おっしゃりたいことがあればいかがでしょう。

### 中村 桂子（JT生命誌研究館館長）

特にいうことはありませんが、ここ（レストラン）に降りてきたら、無心になって食べようと思っていたのに、無心について考えろと言う。こりゃ、無心になれないわ、と思った次第です。貴重なひと時で、面白かったです。

**西平 直（京都大学大学院教育学研究科教授）**

いや、ありがとうございました。

無心っていうこと、無心の問題ってのは、ほんとに訳が分からなくなってくるんです。底なし沼みたいだね。それで、みんながそこに足を踏み入れてきて、おぼれていく姿が、いいぞ、いいぞ、と、うれしくなってきます。

ぼくの親は、「子どもの無心はかわいいね」っていうのを、よーく言っていたんですね。そうすると、ぼくは、自分が大きくなっていくプロセスが、何て言うか、落ちていく、汚れていくプロセスっていうふうに感じてしまっていて、ずっと、それがこだわりなんです。じゃあ、戻れるんだろうか、戻れないとすると、どうしたらいいんだろうか。その意味で「無心」、むしろ「無」ですね。その言葉に行くと、少なくとも、ぼくが学校で習ったような論理では、通用しないっていうか、全部ひっくり返されていくような…。だから、例えば、学生たち、ないし、みなさま方が、こうやって、こういう蟻地獄に入ってきてくれる…これ、うれしいなあ、と。